

「夏休みには家に帰って、みんなと遊ぼうね。」

関ばあちゃんは、私と弟に言った。それはどう考えても嘘だった。私には八十歳年の離れた曾祖母がいる。岐阜県の関市で生まれ育ったそうで、みんなから「関ばあちゃん」と呼ばれている。私が保育園児だった頃は、関ばあちゃんといところは同じ家に住んでいて、近所なので、関ばあちゃんはよく遊んでくれた。けれど、小学生になつてから、関ばあちゃんは介護施設に預けられ、それから全然、顔を見ていなかった。

「今日の日曜日、関ばあちゃんに会いに行くよ。」

七月の何でもない日に、母が突然そう言った。

「関ばあちゃんに会いに行くなんて聞くの、久しぶりすぎる。なんだか変な汗が出てきちゃう。」

思わず、心の中でつぶやいてしまった。

弟と母と祖母、それからいとこの子供のれい君も一緒に、私は車に乗り込んだ。祖母は定期的に関ばあちゃんに会いに行っているらしく、車の中でいろいろな話を聞かせてくれた。

「最近、体調があまりよくなって。」

タイチヨウガヨクナイ？

「もう看取りの時間になつて。」

ミトリノジカン？

「会えるうちに会わなくちゃね。」

アエルウチニ？

祖母の言葉は、いまいち現実味が感じられない。関ばあちゃんに最後に会ったのっていつだっけ。前すぎて覚えていない。現実味がな

いのもしようがない。私のイメージする関ばあちゃんは、杖をつきながら一人でてくてく歩いてきた。それから・・・。

私が保育園児だった頃、保育園から帰ると、いとこの家で、関ばあちゃんと弟とひたすら遊んだ。母が仕事を終えて迎えに来るまで遊び放題。さんぼをしたり、お絵かきをしたり、テレビを見たり。

休日になると、関ばあちゃんは二十分くらいの道のりを歩いて、私の家まで遊びに来てくれたっけ。

「その細い道、通つたら着くよ。」

運転している母が言った。まわりに木がある介護施設は、かわいい建物だった。ここに関ばあちゃんがいるんだ。私の心臓は、もうドキドキしていた。

ガラガラガラ。部屋の扉を開けると、病室みたいな白い床と天井。壁にはたくさんさんの写真が飾られている。そして、白いベットの上に関ばあちゃんが寝ていた。

「関ばあちゃん。ほら、みんな来てくれたよ。」

祖母が話しかける。関ばあちゃんはゆっくりとこちらを向いた。

「ほら、いっくん来たよ。」

祖母に名前を呼ばれた弟が一步、関ばあちゃんに近づいた。

「ひさしぶり。」

少し緊張した表情で弟は言った。でも、関ばあちゃんは、「誰？」というような顔をして、横になったままこちらを向いた。母がアルバムをかばんから取り出した。関ばあちゃんと弟が写っている写真を取り出して言った。

「これ。これがいっくん。覚えてる？」

「・・・遊びに行きたいねえ。」

かすかな声で、関ばあちゃんはずぶやいた。初めての場所で動き回るれい君の世話をしていた私にも、ちゃんと聞こえた。

「今いる、この子がいっくんだよ。」

母がさらに大きな声で言うのと、関ばあちゃんは目を見開いたあと、

弟に向かってゆつくりと手をのばした。弟もそれに応えて手をにぎった。次に、母は私のほうを向いた。

「れい君はお母さんが抱っこしとくから咲葵も顔見せてあげて。」
関ばあちゃんの手をにぎるなんて、いつぶりだろう。思っていた以上に細くなった手は、予想外に強くにぎってきた。それを見て、母が言った。

「咲葵ちゃん、もう受験生なんだって。いつくんも中学生。で、この子がれい君。関ばあちゃんの玄孫（やしやご）。」

関ばあちゃんは今度はゆつくりと母が抱いているれい君の手にふれた。すると、関ばあちゃんの口が開いた。

「夏休みになったら、家に帰って、みんなと遊ぼうね。」

え？関ばあちゃん。この状態で、家に帰れるの？一瞬、きよとんとした。そして、関ばあちゃんの言い方から、きっと嘘なんだろうなと思った。

「みんなとね、たくさん遊ぶためにも、たくさんご飯を食べるんだよ。」

と祖母が元気な声でその嘘を続けた。

今までいろいろな嘘をついてきたし、聞いてきた。けれども、こんなに優しい嘘は初めて聞いた。嘘は、自分の嫌なこと隠したり、他人を傷つけたりするだけじゃないんだ。少し笑っている関ばあちゃんの顔を見て、こう思った。

「またね。」

帰るとき、私はもう一度ぎゅつと関ばあちゃんの手をにぎって言った。寂しそうな顔をした関ばあちゃん向かって、

「また一緒に遊ぼうね。」

と私は言った。弟も私の言葉に続けて

「元気だね。」

と言って、ぎゅつと手を取った。まだ一歳のれい君は、全然喋れないけれど、

「ばいばい。べいべい。」

と母が言いながら手を振った。

私が言った「また一緒に遊ぼうね」は、私が関ばあちゃんについた嘘になった。八月になったばかりの朝。祖母からラインで連絡がきた。

「たった今、旅立ちました。二時五十分。」

関ばあちゃんは、私たちに会ったあと、どんどん体調が悪化していったらしい。あの日、会っていなかったら、再び会うのは難しかったそう。関ばあちゃんが言った嘘が、本当になってほしかった。

これから生きていく中で、誰かを励ます機会はきっとある。そんな時に、そっと元気づけることができるような優しい嘘をつける人間になりたい。